

奈良県立大学学術研究員 研究成果報告書

研究課題（和文）：野生動物の観光資源化の成立要因に関する研究

研究課題（英文）：Research on the process of establishment of wild animals as tourism resources

研究代表者名：水谷知生

学術研究員名（所属先）：平侑子（せとうち観光専門職短期大学）

1. 本研究の概略

本研究では、野生生物との近接関係（餌やり）を観光資源化して一定程度成功している数少ない事例である奈良のシカ（奈良公園及びその周辺に生息するシカ）を中心としてとりあげ、資源化までの歴史的経過が、資源化の成立の重要な要素であるとの仮説に立ち、その過程を文献資料調査を中心に明らかにする。シカの観光利用の主要な形態である餌やりに着目し、奈良において、来訪者が増えた17世紀以降、近代に至るまで、餌やりの確立、態様の変遷、シカの管理方法の変遷、シカの観光資源としての紹介の変遷などから観光資源化の経過とそれが奈良の人とシカの関係性にどのような影響を及ぼしたかを明らかにする。

2. 本研究の内容及び本研究で明らかにしたこと

(1) 奈良の人とシカとの関係性

奈良の人とシカとの関係性は、中世には①神聖性が重視される存在であったが、近世に入り②生活上の軋轢を積極的に調整し共存すべき存在となった。そこに、近世後期以降、来訪者の増加とともに観光対象化される奈良のシカに対し、③来訪者対応という側面が加わってきている。この第三の側面は、来訪者の増加とともに否応なく観光化される奈良のシカに対する対応と言える。現在、奈良のシカは観光資源として捉えられるが、意外にも、シカを観光資源として、近接した関係性（餌やりなど）を正面からとりあげるガイドブックはほとんど見られない。①、②の側面と③の側面は時に調整が難しい面を持っている。神聖性を有する対象への餌やり行為の可否、生活空間付近でのシカと人の近接性の確保の可否、という

両立が難しい事象が生じる。このような事象をどう調整してきたのか、奈良の人とシカの関係の長い歴史の中では、ある意味新しい関係性と捉えられる③の側面の定着経過を明らかにすることで、観光資源化が一定程度成立してきた要因と、奈良のシカと人の関係の現状全体を理解することが可能となり、今後の関係性、特に観光対象としての関係性を考える視点を提供することができる。

(2) 近世以降の奈良の人とシカの近接関係の成立経過

奈良のシカと来訪者の関係を示す資料として、表1に示す近世、近代の資料を収集し、

- (1) 近世の案内書
- (2) 近世の紀行文
- (3) 近世の道中日記
- (4) 明治期案内書
- (5) 明治期外国人旅行記

それぞれについて、内容を分析した。

表1 来訪者とシカの関係が示されている可能性のある資料の時期別の種類と数

	案内書	紀行文	道中日記	外国人旅行記
江戸期（1650～1700）	12	2	1	
江戸期（1701～1750）	9	0	4	
江戸期（1751～1800）	9	2	23	
江戸期（1801～1850）	4	4	113	
江戸期（1851～1867）	2	2	62	
明治初期（1868～1880）	0	0	13	7
明治中期（1881～1895）	16	0	17	26
明治後期（1896～1911）	24	6	2	19
大正・昭和初期（1912～1945）	19	調査中		調査中

(1) 近世の案内書では、図1としてシカを描くものはあり、『大和名所図会』（1791）では、今と同じようにシカに食べ物を与える関係が見られる。案内書の記述では、シカの数が多いことを記したものはあるが、シカと来訪者との関係は記されていない。

近世の奈良への来訪者は江戸時代初期から参詣客が増加し、道中日記と紀行文が残されている。

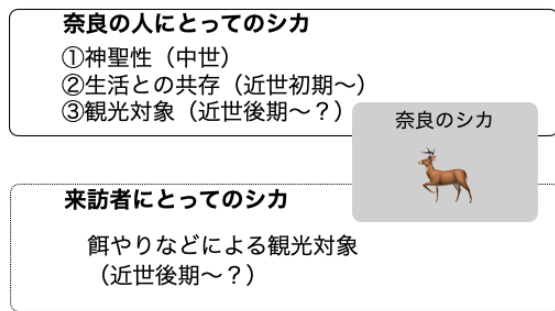


図1 奈良の人と来訪者の奈良のシカの捉え方

(2) 近世の紀行文の件数は少ないが、1700年代までの紀行文ではシカは風景として描かれるが来訪者との関係、餌やりについては記されていない。1800年代の紀行文では、人に馴れている、食べもの(菓子、くだもの)を求める、人のたもとや裾にまとわりつく、餌売りがいる、食を投げ与えるなど、来訪者とシカの関係が記されている。

(3) 近世の道中日記は、200件ほどの翻刻されたものでシカに関する記述を解析し、江戸後期には、巡礼に来る旅人に対して餌を求めて近寄ってくるシカの様子や、子供が旅人に向けて餌を売っている様子などが確認できる。1771年に餌を買った最初の記録があり、その後与えられていた餌は、せんべい、野菜、果物、おからの団子など多様である。紀行文、道中日記とも1800年頃以降、シカへの餌やりが多く記され、この時期に餌やりが常態化したと考えられるが、他の資料と合わせ検討すると、1750年頃にはシカの餌を売る者が存在し、来訪者が餌やりを行っていた。

(4) 明治期の案内書では、明治中期の案内書には鹿が人馴れしている、餌を求めるといった人との関わりに関する記述はほぼみられない。明治後期には、人馴れや餌を求めるといった記述がみられ、博文館の大橋又太郎(乙羽)は『千山萬水』(1899)「奈良の古都」では、「一の鳥居を行けば無数の鹿ども右に左に纏綿ひて馴れ睦む様の愛らしさ、一同興がりて糠煎餅に財布の底をはたき」と、紀行文調で人と鹿の関わりを記した。『千山萬水』は博文館の持つ流通網によって全国で販売され、明治40年代に至るまで20版以上は増刷され広く流布し、人馴れした鹿が餌を求める奈良の鹿の様子が広く知られる機会となったと推定される。

(5) 明治初期、中期の日本人の来訪者の記録は少なく、この時期は外国人による旅行記がシカと人との関係の実態を知る資料として有用性が高い。明治期に奈良を訪問した外国人旅行記52点を確認、そのうちシカについての記述がみられたものは47点、全体の9割であった。外国人旅行記からは、奈良のシカと遭遇した場所がおおむね春日大社の参道と公園に限られ、東大寺附近で遭遇したとの記述はないというシカの分布場所が限定的である点が示された。また、シカの餌として売っていたものは、cakes, Kuhen が最も多く、次いでbiscuitsが多く、木の実、団子状の餌もあり種類が豊富である。餌の売り手はすべて女性であった。餌の販売形態は、参道のあちこちに小さな茶屋がありシカのcakesを購入できた、あるいは参道に露店形式で餌が売られていたことが示されている。

5 種類の資料の検討から

- ・1750年頃には、奈良への来訪者にシカへの餌を売る者が存在し、来訪者は餌やりを行っていた＝人によく馴れている状況が成立
- ・明治期に奈良の人とシカとの関係が大きく変化(四条県令による農業被害防止のための鹿園の設置)したが、餌やり(観光資源としてのシカ)は江戸期の関係が継続
- ・明治期の餌やりの実態(餌の種類が多様、販売場所は春日参道両側、販売者は女性、餌やりをした場所は春日大社境内と公園)が明らかになった
- ・江戸後期から明治期の変化として、餌売り子供から女性が担っていることが明らかとなった。

4. 本研究の諸成果

〔雑誌論文〕

- 水谷知生・平侑子(2021) 近世近代の奈良に関する案内記類にみる鹿、奈良県立大学研究季報 32(1), 41-76
- 平侑子・水谷知生(印刷中) 明治期における旅行者と奈良のシカの関係ー外国人旅行記の分析からー、人と動物の関係学会誌

5. 外部資金(科研費を含む)事業への申請予定等の今後の展開について

科研費 2020年度 基盤研究(C)奈良のシカを中心とした野生生物の観光資源化に関する研

究 として採択。

継続して (1) 大正昭和初期の餌やりの状況
確認

(2) 奈良において餌やり（観光資源化）が安
定的に継続した要因の整理

(3) (2) について他地域（宮島など）との比
較

(4) 奈良のシカと各地での「神鹿」飼養
等について研究を進める。